

Olympic

オリンピック教育

Vol.13 2024/04-2025/03

Education



筑波大学オリンピック研究教育センター
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

第13巻の刊行によせて	清水 諭 ...	2
-------------------	----------	---

研究・活動報告

東京2020大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2024年度）	宮崎 明世 ...	3
第4回国際オリンピック研究センターコロキウム（OSRC Colloquium）報告	大林 太朗 ...	10

実践報告

附属小学校	山崎 和人 ...	14
附属中学校	秋山 和輝 ...	15
附属高等学校	鮫島 康太 ...	19
附属駒場中・高等学校	登坂 太樹 ...	21
附属坂戸高等学校	渡會 愛梨 ...	23
附属視覚特別支援学校	山本 夏幹 ...	24
附属聴覚特別支援学校	荒川 郁朗 ...	26
附属大塚特別支援学校	宇佐美太郎 ...	28
附属桐が丘特別支援学校	岩井 俊夫、寒河江 核 ...	32
附属久里浜特別支援学校	石川 千尋 ...	35

筑波大学は、2025 年 4 月に東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（以後、東京 2020 大会）のレガシーとして、多様性と調和、持続的な地球環境の創造を基盤にした共生社会の実現に向けた教育の構想と展開を目的にして「オリンピック研究教育センター（Centre for Olympic Research and Education）」（CORE）を設置しました。

これまで本学では、嘉納治五郎先生の生誕 150 周年を記念してオリンピック教育プラットフォーム（CORE）を 2010 年 12 月に設置し、日本で唯一の IOC 公認オリンピック研究センターとして活動してきました。東京 2020 大会の際には、附属学校群（オリンピック教育推進専門委員会）と連携し、スポーツ庁や大会組織委員会、日本オリンピック委員会（JOC）や日本パラリンピック委員会（JPC）などと協力して「オリ・パラ教育」の名称とともにオリンピック及びパラリンピックに関する価値教育を全国規模で展開してきています。

今後も学術的知見とネットワークを生かし、パラスポーツに関する研究と教育実践、スポーツ・インテグリティ教育の推進、アンチ・ドーピング研究、オリンピック・パラリンピックに関するアーカイブズの収集・整理・活用を推進してまいります。また、つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）やスポーツ国際開発（IDS）共同専攻（いずれのプログラムも英語による教育）の修了生ネットワーク及びさまざまな国際機関との連携を強化・拡充し、オリンピックやパラリンピックに関する研究と教育に関する国際拠点として活動していきます。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2024 年度）

筑波大学体育系准教授 宮崎 明世

I. はじめに

2024 年夏にオリンピック・パラリンピック・パリ大会が開催され、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催から丸 3 年が経過したことになる。大会終了後から継続して、東京 2020 大会に向けて全国各地で進められたオリンピック・パラリンピック教育（オリ・パラ教育）の大会後の継続に関する調査を実施してきた^{1) 2)}。昨年度（大会終了 2 年後）の調査からは、大会終了から時間がたつにつれて回答数が減少し、教育活動の実施率が低下することが懸念された。2024 年 7－8 月にはパリにおいて、オリンピックが、9 月にはパラリンピックが開催されたが、大会が開催されたことでなんらかの影響はあるのだろうか。また、東京 2020 大会が残したレガシーを明らかにするためにも、大会後のオリ・パラ教育の実態について継続的に調査する必要がある。また、教育の成果が表れるには時間がかかることも考えられ、大会の成果や影響についても同様に継続的な調査が必要である。

本稿では、東京 2020 大会後の学校におけるオリ・パラ教育の実態と大会による影響を明らかにすることを目的として実施している継続調査について、2024 年度に行った調査結果を報告するとともに、これまでの調査結果との比較から大会後のレガシーについて検討する。

II. 方法

1. 対象

本調査では、スポーツ庁の全国オリンピック・パラリンピック・ムーブメント展開事業に参加した自治体のうち、2023 年度の調査で対象とした A 県、B 県、C 県、D 県に新たに E 県を加え、5 県の公立小・中・高・特別支援学校を対象とした。

初年度から継続対象である A 県の回答数は 417 校、B 県の回答数は 365 校で、いずれも昨年度（A 県 280 校、B 県 238 校）と比べて大幅に増加した。C 県の回答数は 55 校で昨年度 42 校から若干の増加、D 県は 289 校で昨年度とほぼ同数であった。2023 年度調査では、前年度と比べてすべての対象地域において回答数が大幅に減少したが、今年度は 2 県で大幅に増加した。また、今年度新たに対象とした E 県は東海地域に位置し、大会開催までの全国展開事業に積極的に参加していた。大会終了後に県が主体となって学校を対象としたアスリート派遣事業を行っており、本調査への回答校数は 107 校であった。

対象とした各地域の校種の内訳を表 1 に示した。すべての対象について、小学校が全体の半数以上を占め、次いで中学校、高等学校の順で、特別支援学校からの回答は各県ともに 5% 未満であった。回答校に占める校種の割合は、これまでの調査と大きな変化は見られなかった。

表 1. 対象地域の回答校の内訳

校種	A 県		B 県		C 県		D 県		E 県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
小学校	266	63.8	203	55.6	33	60.0	189	65.4	80	74.8
中学校	113	27.1	98	26.8	16	29.1	71	24.6	16	15.0
義務教育学校	9	2.2	0	0.0	0	0.0	2	0.7	0	0.0
高等学校	20	4.8	53	14.5	3	5.5	15	5.2	8	7.5
特別支援学校	8	1.9	11	3.0	3	5.5	11	3.8	3	2.8
中等教育学校	1	0.2	0	0.0	0	0.0	1	0.3	0	0.0
合計	417		365		55		289		107	
昨年度の回答数	280		238		42		287		—	

2. 調査期間とデータの収集

調査は 2024 年 7 月～9 月に実施した。昨年度までと同様に、各県の教育委員会を通して調査を依頼し、Google Form を用いて

オンラインにて調査を行った。昨年度までの調査への回答から、オリ・パラ教育の定義が十分に理解されていないことが課題として示されたため、より実態に即した回答を得られるように、質問項目に若干の変更を加えた。今年度調査の質問項目ではまず、2024年度のオリ・パラ教育の実態として、オリンピックやパラリンピックに関わる題材を教科教育、学校行事、講演や体験活動、福祉・人権教育のそれぞれで活用しているかどうかを尋ねた。また、今年度のオリ・パラ教育の実践について、教育活動を実施したかどうか、実施した場合はその内容、実施しなかった場合はその理由、オリ・パラ教育の継続のために必要な支援等を尋ねた。さらにオリ・パラ教育の影響について、児童生徒の様子、学校の取り組み、地域や教員同士の関わりのそれぞれに、大会や教育活動の影響と考えられることはあるか、これまでと同様に尋ねた。

Ⅲ. 結果と考察

1. オリ・パラ教育活用の実態

2023年度の調査結果から、東京大会の終了から時間がたつにつれ、オリ・パラ教育の概念に対する理解が不十分と思われる回答が増加したため、今年度調査では質問項目をより具体的にすることで実態を反映できるよう検討した。その結果、質問項目を「1. オリンピック・パラリンピックに関わる題材を教科教育で活用しているか」「2. オリンピック・パラリンピックを学校行事で活用しているか」「3. オリンピック・パラリンピックに関わる講演や体験活動などを行っているか」「4. 『福祉』『人権』などの教育の題材として、パラリンピックや障がい者スポーツを活用しているか」とした。

1-1. 教科教育における活用（表2）

まず、教科教育におけるオリ・パラにかかわる教材の活用について尋ねた。各県の対象のうち、A県69.5%、B県55.9%、C県74.5%、D県64.7%、E県64.5%の学校が「活用している」と回答し、高い確率で活用されていることが示された。その内最も多かったのは、「体育・体育理論」が14.1～71.0%、「道徳」が35.2～67.9%、総合的な学習／探求の時間が12.8～31.9%であった。そのほかには「外国語」4.3～10.8%、「国語」2.7～12.8%などの回答があった。

後述するとおり、教育活動を実施しない理由として、「教育課程に位置付けられていない」という回答が例年挙げられるように、学校教育にオリ・パラ教育を位置付けるには、教科の学習内容とのかかわりを示し、学習に有効な教材として示すことが継続の鍵となる。今回の調査では、さまざまな教科に教材として位置付けられていることが明らかになった。

表2. オリンピック・パラリンピックに関わる題材の教科教育における活用

	A県		B県		C県		D県		E県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	290	69.5	204	55.9	41	74.5	187	64.7	69	64.5
活用していない	127	30.5	161	44.2	14	25.5	102	35.3	38	35.5
合計	417		365		55		289		107	

1-2. 学校行事等における活用（表3）

次にオリ・パラの学校行事における活用について尋ねた。「活用している」と回答したのは、A県16.5%、B県13.2%、C県20.0%、D県13.8%、E県11.2%といずれの自治体でも2割に満たない割合であった。その内訳として、運動会／体育祭がB県、C県では5割に満たなかったが、それ以外の県では全体の7割前後を占めた。「交流会」は、回答自体の少なかったE県では1割に満たなかったが、他の4県では2割から5割弱（B県）を占めた。もう一つの選択肢である「文化祭／学園祭」は回答の少なかったC県では3割程度であったが、その他の県では4.2～8.3%と低い割合であった。

大会開催までのオリ・パラ教育活動では、種目を工夫したりしてオリ・パラの要素を運動会に取り入れたり、文化祭／学園祭で調べ学習の成果を発表したりする活動が一定数行われていたが、本調査の結果からは実施率は高いとは言えなかった。学校では、児童生徒は毎年学年が進み、公立学校の教職員は数年で異動することが考えられるため、行事に関連した活動が継続されたとしても数年で長くは続かない可能性も考えられる。

表3. 学校行事におけるオリンピック・パラリンピックの活用

	A県		B県		C県		D県		E県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	69	16.5	48	13.2	11	20.0	40	13.8	12	11.2
活用していない	348	83.5	317	86.8	44	80.0	249	86.2	95	88.8
合計	417		365		55		289		107	

1-3. オリンピック・パラリンピックに関わる講演や体験活動（表4）

オリ・パラに関わる「講演や体験活動」を行っているかを尋ねた。大会後に県が主体となってパラアスリート派遣事業を行っているB県では33.2%、アスリート派遣事業を行っているE県では57.9%が「行っている」と回答した。その他の県では、2割前後の学校が行っており、県が派遣事業に関わっているか否かで活用の程度に差があることが示された。

大会開催までは最も多く行われた外部講師の講演・講習であったが、講師の謝金や交通費などの費用の確保が必要となり、大会後はその点が課題として挙げられていた。また、講師の選定や、依頼のプロセスが困難であることも課題であった³⁾が、大会終了後はそれまでに構築された関係を活かすことも期待されていた。さまざまな課題を抱えつつも2割程度の学校で継続されていることは、何らかの方法で費用を捻出したり、構築された関係を活かしたりして活動が継続されていることも推察される。

表4. オリンピック・パラリンピックに関わる「講演や体験活動」の実施

	A県		B県		C県		D県		E県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
行っている	82	19.7	121	33.2	15	27.3	61	21.1	62	57.9
行っていない	335	80.3	244	66.8	40	72.7	228	78.9	45	42.1
合計	417		365		55		289		107	

1-4. 『福祉』『人権』教育の題材としての活用（表5）

これまでの調査で活用の実績があった『福祉』『人権』などの教育の題材として、パラリンピックや障がい者スポーツを活用しているかどうかを尋ねた（表5）。「活用している」と回答した学校が、A県で53.2%、B県で56.4%、C県で49.1%、D県で42.6%、E県で53.3%と、いずれの県でも4～5割強の高い確率で活用されていた。このことから、パラリンピックや障がい者スポーツは「福祉」「人権」などの学習に親和性が高く、教材として適していることが示された。

大会開催までの教育活動とこれまでの調査の結果から、オリ・パラに関わる題材が活用されている活動を抽出してその活用の実態を明らかにしようとしたが、「体育・体育理論」や「道徳」をはじめとするさまざまな教科の教材として活用されていることが明らかとなった。オリ・パラ教育として特別に時間を確保しなくても、教科の学習内容を効果的に学ぶ題材として、オリ・パラに関連する内容が活用できることが示された。学校教育にオリ・パラ教育が定着するための一つの手がかりとなると考えられる。

表5. 『福祉』『人権』などの題材としてのパラリンピックや障がい者スポーツの活用

	A県		B県		C県		D県		E県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	222	53.2	206	56.4	27	49.1	123	42.6	57	53.3
活用していない	195	46.8	159	43.6	28	50.9	166	57.4	50	46.7
合計	417		365		55		289		107	

2. 今年度（2024）のオリ・パラ教育の実施とその内容

2-1. 教育活動の実施（表6）

今年度（2024）のオリ・パラ教育の実施について、まず、教育活動を行ったかどうかを尋ねた（表6）。「すでに行った、行う予定がある」と回答したのは、A県43.4%、B県46.0%、C県50.9%、D県48.4%、E県63.6%であった。昨年度の調査から、

自治体によって差はあるものの、2021年度は6割前後、2022年度には5割前後、2023年度は4割前後と時間を追って実施率が低下していた。それに対して今年度は4割から6割と実施率が維持・向上傾向にあった。対象校やその数が年度ごとに異なることから、単純な比較はできないが、大会終了から時間が経過してからも、実施率の低下傾向に歯止めがかかったといえる。このことはパリ大会の開催にともない、大会の情報や日本選手の活躍が報道されたことで、社会全体の関心が高まり、児童生徒や教員の関心も高まったことが要因の一つと考えられる。

表 6. 2024 年度のオリ・パラ教育活動の実施

	A県		B県		C県		D県		E県	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
すでに行った、行う予定がある	181	43.4	168	46.0	28	50.9	140	48.4	68	63.6
行う予定はない	61	14.6	86	23.6	8	14.5	74	25.6	23	21.5
未定	175	42.0	111	30.4	19	34.5	75	26.0	16	15.0
合計	417		365		55		289		107	

2-2. 具体的な活動内容（表 7）

今年度教育活動を行った学校に対して、具体的な活動内容を尋ねた。全体を通して、最も多かったのは「道徳」「体育・体育理論」「教科等授業」などの「授業」で、「道徳」では福祉・人権、選手の逸話や共生社会などの学習に活用されていた。「教科等授業」では、国語、社会、英語、音楽、理科、美術などの様々な教科で教材として活用されていることが示された。この結果は昨年度までと同様で、学習内容として定められている「体育・体育理論」における学習はもちろん、「道徳」における多様な教材としてパラリンピックやパラスポーツ、選手の逸話などが教材として適していると考えられる。また、その他のさまざまな教科においても、児童生徒が身近に感じる題材としてオリ・パラに関する題材が活用されていることが推察される。

そのほかの活動内容としては、先に上げたとおり、県がアスリート等の紹介を行っている場合は講演・体験の活用が多く挙げられた。

表 7. 2024 年度の活動内容

カテゴリ	活動の内容	A県 (n=181)		B県 (n=168)		C県 (n=28)		D県 (n=140)		E県 (n=68)	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
道徳	人権・福祉、選手の逸話、共生社会	64	35.4	26	15.5	7	25.0	41	29.3	4	5.9
体育・体育理論	映像、ニュースポーツ、パラスポーツ	47	26.0	21	12.5	8	28.6	25	17.9	5	7.4
教科等授業	国語、社会、英語、音楽、理科、美術	41	22.7	18	10.7	3	10.7	9	6.4	-	-
講演・体験	アスリート派遣事業、ブラインドサッカー、オリ・パラアスリート、車いすラグビー	17	9.4	20	11.9	6	21.4	8	5.7	28	41.2
体験	パラスポーツ、ボッチャ、車いす、ブラインドサッカー、オリ・パラレガシー事業	16	8.8	50	29.8	-	-	32	22.9	19	27.9
学校行事	運動会／体育祭、持久走、縄跳大会、ドッジボール大会	13	7.2	4	2.4	2	7.1	5	3.6	4	5.9
総合的な学習／探究	福祉、ボッチャ、キャリア教育、生き方	10	5.5	3	1.8	3	10.7	6	4.3	3	4.4
オリ・パラ学習	歴史・意義、出場国、映像視聴、パリ・オリンピック	15	8.3	2	1.2	-	-	10	7.1	4	5.9
集会	講話、クイズ	3	1.7	1	0.6	2	7.1	2	1.4	-	-
特別活動	学級活動、クラブ活動、部活動	4	2.2	1	0.6	-	-	2	1.4	-	-
外部団体によるイベント	あすチャレ、夢の教室	-	-	13	7.7	1	3.6	-	-	-	-
交流	特別支援学校、他校種、地域	-	-	2	1.2	-	-	8	5.7	1	1.5
国際理解		2	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	I'mPOSSIBLE、オリ・パラコーナー、応援メッセージ、学級活動、宿泊学習、生徒指導	5	2.8	2	1.2	5	17.9	3	2.1	-	-

3. 今年度（2023 年度）オリ・パラ教育を実践しない理由（表 8）

今年度オリ・パラ教育を実践しないと回答した学校に対して、その理由について尋ねた。A 県、B 県、C 県では、「時間の確保が困難」（優先順位が低い、他にやるべきことがある）が最も多く、D 県、E 県では「教育課程に位置付けられていない」が

最も多かった。この傾向は、これまでの調査と同様であった。中には「昨年度行った」という回答も一定数あり、「必要性を感じない」「子どもの関心が薄い」などの回答もあった。オリ・パラ教育は大会に向けて一時的に行われるものではなく、普遍的に行うことができるものであるという理解が普及していないことはこれまで同様に示唆された。今年度の調査では、教科の学習内容と親和性の高い題材については、教材として活用されていることも多く、そういった教材を作成して新しい情報に更新していくような仕組みが必要であると考えられる。また、オリ・パラ教育の意義や目的などを広めることも、レガシーとしての教育の継承には必要であろう。

表 8. オリ・パラ教育を実践しない理由

理由	A県 (n=61)		B県 (n=86)		C県 (n=8)		D県 (n=74)		E県 (n=23)	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
時間の不足	22	36.1	29	33.7	5	62.5	18	24.3	3	13.0
教育課程に位置付けられていない	7	11.5	11	12.8	1	12.5	32	43.2	7	30.4
実践の機会が少ない／ない	5	8.2	2	2.3	-	-	1	1.4	-	-
教材・情報の不足	5	8.2	3	3.5	1	12.5	2	2.7	3	13.0
昨年度行った	2	3.3	4	4.7	-	-	7	1.4	1	4.3
他の活動を優先	-	-	12	14.0	-	-	3	4.1	3	13.0
必要性を感じない	-	-	9	10.5	-	-	2	2.7	-	-
子どもの関心が薄い・身近に感じない	-	-	1	1.2	-	-	6	8.1	-	-
計画が困難	4	6.6	1	1.2	-	-	1	1.4	-	-
内容が分からない	3	4.9	-	-	-	-	-	-	-	-
行事の精選	-	-	-	-	-	-	4	5.4	-	-
その他	4	6.6	1	1.2	1	12.5	2	2.7	2	8.6
	隔年で実施、研修の不足、見通しが持てない、学校の実態に合っていない、		講師を知らない		教員の負担が大きい		学校規模が小さい、学校の方針		事業の申し込みができなかった、施設の問題	

4. 必要な支援（表 9）

オリ・パラ教育を継続するために必要な支援について尋ねた。すべての自治体に共通して最も多かった回答は、「教材・資料・情報の提供」（映像・資料、事例、情報など）で昨年度と同様の結果であった。次に「講師の派遣、後援会の実施」で、県によってはこの回答が最も多かった。他には、「教育課程への位置づけ」「意義の周知・興味の喚起」「教員の知識・研修」「体験の機会」「時間的余裕」などの回答が各県で共通してあげられた。「意義の周知・興味の喚起」についてはこれまであまり上がらなかった回答で、子どもにとって身近でないという回答も散見された。また、「教員の知識・研修」という回答からも、東京 2020 大会に向けて行われていた研修や教材紹介などが大会終了後は行われなくなり、教育活動の意義の普及とともに教育を行う教師の学びの場を提供することが求められていることが示された。

表 9. オリ・パラ教育を継続するために必要な支援（上位抜粋）

カテゴリー	具体例	A県 (n=417)		B県 (n=365)		C県 (n=55)		D県 (n=289)		E県 (n=107)	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
教材・教員・資料、情報	授業で使える教材・教員（用具）、動画コンテンツの提供、新しい情報の更新	183	43.9	103	28.2	27	49.1	94	32.5	15	14.0
講師の派遣、講演会の実施	費用の掛からない講演、講師（オリンピック・パラリンピアン、専門家等）の派遣	79	18.9	97	26.6	8	14.5	69	23.9	34	31.8
教育課程への位置づけ	教科書で扱う、教育課程に位置付ける	45	10.8	21	5.8	3	5.5	27	9.3	4	3.7
意義の周知、興味の喚起	主旨の再確認、周知、興味を持たせるような工夫、教師の必要感	25	6.0	15	4.1	4	7.3	7	2.4	5	4.7
教員の知識・研修	教員の知識不足、教員研修	17	4.1	2	0.5	3	5.5	4	1.4	3	2.8
体験の機会	スポーツ体験	24	5.8	14	3.8	1	1.8	14	4.8	4	3.7
時間的余裕	他の学校行事や学習内容の精選	14	3.4	19	5.2	1	1.8	18	6.2	6	5.6
予算的支援	講師や指導者の謝金・交通費、用具購入	12	2.9	16	4.4	2	3.6	13	4.5	-	-
身近に感じる仕組み	オリンピックや競技を身近に関わるようなしくみ	8	1.9	12	3.3	2	3.6	13	4.5	6	5.6
教師の負担軽減		3	0.7	1	0.3	1	1.8	7	2.4	5	4.7

5. オリ・パラ教育の影響

5-1. 児童生徒への影響

児童生徒の様子に、東京 2020 大会の影響と考えられることはあるかどうか尋ねた。「ある」と回答したのは A 県 27.6%、B 県 15.6%、C 県 14.5%、D 県 18.3%、E 県 18.7%であった。これに対して「ない」の回答は A 県 23.0%、B 県 24.7%、C 県 41.8%、D 県 27.0%、E 県 29.0%で、「わからない」は A 県 49.4%、B 県 59.7%、C 県 43.6%、D 県 54.7%、E 県 52.3%であった（表 10）。「影響がある」と回答した学校は、A 県を除くすべての県において 2 割以下で、昨年度の「東京 2020 大会の影響はあったか」という質問への回答と比較すると、すべての自治体で昨年度より低い割合であった。また、昨年度の調査と比較して「わからない」という回答が減り、「ない」の回答が多くなった。C 県においては 4 割程度が「影響はない」ということであった。これらのことから、大会終了後時間がたつにつれて、その影響は認識されにくくなることが示された。

大会の影響と考えられることが「ある」と回答した学校に対して、その内容を尋ねた。各自治体に共通して最も多かったのは、オリ・パラそのもの、スポーツ、外国等に対する「関心が高まった」という回答で、B 県を除く各県で 5 割程度を占めた。この傾向は昨年度と同様であった。そのほかには、「スポーツへの参加が増えた」、種目やパラスポーツ、ルールなどに関する「知識・理解」も各県で共通に上げられた。スポーツやオリンピックに関する「話題が増えた」、スポーツに対する「意欲の向上」、挑戦や努力といった「道徳的影響」も挙げられた。内容に関しては昨年度までと類似する回答であった。

表 10. 児童生徒への影響

	A県		B県		C県		D県		E県	
回答	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	115	27.6	57	15.6	8	14.5	53	18.3	20	18.7
ない	96	23.0	90	24.7	23	41.8	78	27.0	31	29.0
わからない	206	49.4	218	59.7	24	43.6	158	54.7	56	52.3
合計	417		365		55		289		107	

5-2. 学校の取り組みへの影響

大会開催以降に、学校の取り組みへの影響があったかどうか尋ねた。影響が「あった」と回答したのは A 県 21.1%、B 県 19.5%、C 県 29.1%、D 県 27.0%、E 県 30.8%であった（表 11）。すべての県で、2 割から 3 割程度の学校が影響があったと回答したが、昨年度と比較して大きな変化はなく、児童生徒への影響と比較すると時間の経過に伴う低下は見られなかった。

学校の取り組みに影響があったと回答した学校に対して、その内容を尋ねた。最も多かったのは「新しい取り組みの導入」で、体育授業をはじめとする授業やクラブ活動、学校行事などにオリ・パラ関連の取り組みを取り入れ、それが継続されている様子がうかがえた。運動会・体育祭の種目やルールの工夫、スポーツや障がい者スポーツへの関心の高まりや、特別支援学校や地域との交流活動などの回答もあった。学校の取り組みについては、大会に向けて取り入れたものが継続されている様子が見られ、レガシーの一つとして示されたといえる。

表 11. 学校の取り組みへの影響

	A県		B県		C県		D県		E県	
回答	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	88	21.1	71	19.5	16	29.1	78	27.0	33	30.8
ない	329	78.9	294	80.5	39	70.9	211	73.0	74	69.2
合計	417		365		55		289		107	

5-3. 教員間や地域との関わりへの影響

学校の教職員間や地域との関わりに、大会の影響があったかどうか尋ねたところ、「あった」と回答したのは A 県 12.0%、B 県 11.0%、C 県 10.9%、D 県 12.8%、E 県 16.8%であった。いずれの自治体も 1 割程度の学校が、影響があったと回答したが、この割合は児童生徒よりも低く、学校の取り組みよりもさらに低い割合であることはこれまでの調査と同様であった（表 12）。さらに、昨年度は 2 割を超える自治体が半数であったのに対して、今年度は低い値となった。

大会の影響があったと回答した学校に対して、どのような内容かを尋ねた。最も多かったのは、スポーツや障がい者に対する

「関心の高まり」で、次に地域や教員研修などの「交流が深まった」こと、さらに地域の施設活用や体験会、外部との連携などの「地域との連携」などが挙げられた。また、「共通の話題が増えた」「知識・理解が深まった」という回答も見られた。昨年度の調査からは、オリ・パラが地域や教員の間で共通の話題となり、コミュニケーションの促進に役立ち、理解が深まったことが伺えたが、活動が続けられる限り、その影響も継続していくと考えられる。

表 12. 教員間や地域とのかかわりへの影響

	A県		B県		C県		D県		E県	
回答	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	50	12.0	40	11.0	6	10.9	37	12.8	18	16.8
ない	367	88.0	325	89.0	49	89.1	252	87.2	89	83.2
合計	417		365		55		289		107	

IV. まとめ

本調査では、東京 2020 大会に向けたオリ・パラ教育の大会終了 3 年後の実態と、教育活動が残した影響について明らかにすることを目的とした。今年度は、対象自治体を昨年度よりも 1 つ増やして調査を実施したが、各自治体の回答校数は昨年度までの傾向とは大きく異なり、県によっては大幅に増加した。これは 2024 年夏にパリ大会が開催され、メディアを通して多くの情報が広まったことで、児童生徒や教員の関心が高まったことが要因と考えられる。また、大会後時間がたつにつれてオリ・パラ教育活動の実践割合が減少していたが、これについても増加または大きな変化がないという結果であった。大会の開催に伴って情報量が増え、社会全体の関心も高まることから、オリ・パラ教育活動の実施には大会開催の影響があると考えてよいであろう。夏季大会と冬季大会の関心の度合いに違いはあるものの、オリンピック・パラリンピック競技会はおよそ 2 年に一度開催されることから、今後も大会ごとに情報の更新を行っていくことで、時節にあった教材を用いて普遍的な価値教育を行うことが可能になる。教育活動を行わない理由として、これまでに継続して時間の確保の困難や新たな情報や教材の不足が示されているが、今年度示されたように、学習内容を学ぶための教材として教育課程の中で取り上げることができれば、新たな時間を確保しなくても有効な活用ができる。そのような活用こそが東京 2020 大会のレガシーであり、大会後にさらに発展させていくための手段となるであろう。

また、オリ・パラ教育の影響について、児童生徒や、学校の取り組み、地域や教員間それぞれの観点から影響があったことが認められた。児童生徒は成長して学年が進み、公立学校では教員の異動も進む。子どもたちの成長に関わるオリ・パラ教育の影響を明確に示すことは難しいが、目に見えない形での学びや活動の影響はあると考えられる。また、教員が異動することで、さまざまな経験を持った教員が交流し、オリ・パラを活用した新たな教育活動の展開も期待される。

今年度の調査結果から、今後も継続的に調査を行うことに意義が見いだせたといえる。つまり、大会開催年でない場合に回答数や実施率が低下し、開催年には復活するのかなど、さらなる継続調査によって明確にできる可能性がある。さらに、今年度から質問の仕方に若干の変更を加えたが、同様の質問形式を継続することで、より変容が明らかになるのではないだろうか。

今年度の対象には、大会後に自治体が主導して、アスリートを派遣する事業を行っている自治体が 2 つ含まれた。今回の調査でも他県との差は示されたが、今後も得られる結果を比較することで、求められる支援も明確にできると考えられる。

<参考文献>

- 宮崎明世（2023）東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2022 年度）. オリンピック教育 vol.11, 3-8.
- 宮崎明世（2024）東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2023 年度）. オリンピック教育 vol.12, 3-7.
- 宮崎明世（2019）学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開と評価：2016・2017 年オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業報告書から. 体育学研究 64(2), 855-868.

第4回国際オリンピック研究センターコロキウム（OSRC Colloquium）報告

筑波大学体育系助教 大林 太郎

2024年7月22日から24日にかけて、宮崎明世委員とともに、フランス・ブサンソンのフランシュコンテ大学で開催された第4回オリンピック研究センターコロキウムに出席した。本コロキウムは4年に1度、世界各国・地域にあるIOC認可のオリンピックスタディーセンター：Olympic Studies and Research Centres（OSRCs、世界に81拠点※）が一堂に会して学術交流を行うもので、2012年は英国のLoughborough Universityで、2016年はブラジルのPontifical Catholic University of Rio Grande do Sulで、そして2021年は筑波大学（オンライン）で実施されてきた経緯がある。

※参考：各国・地域のOSRCs一覧：<https://www.olympics.com/ioc/olympic-studies-centre/olympic-studies-in-the-world>

第4回のプログラムは添付の通りである。22日午前は開会行事とパリ2024関係者からの話題提供（想定される大会レガシーに関して）、午後はIOCオリンピック研究センターによる各国・地域のOSRCsのレポート、夕刻にはバルセロナ自由大学のエミリオ氏らによる基調講演があった。23日にはワークショップ形式で各国・地域のOSRCの教育関連事業や共同研究の可能性について意見交換を行った。24日はブサンソンからスイス・ローザンヌに移動し、IOCのHeadquarterやミュージアムのバックヤードを視察した。

今回のコロキウム参加を通して、特に2日目のワークショップの際に決定（合意）された事項のうち、COREが主題とする「オリンピック教育」との関連で特筆すべき事項は以下の3点である。

- 1) OSRCs間でオンライン教育・学習コンテンツを共有・配布するためのシステムを構築し、利用可能なプラットフォームを利用する。
- 2) IOC OSCは、教育学的なイノベーションやベストプラクティスを含む教育マニュアル、指導用ハンドブック（教育・学習リソース）を収集し、共有する。
- 3) オリンピック・スタディーズは、それぞれの国や地域により適したものとなるよう、地域の伝統を含む社会的、歴史的、文化的背景を考慮すべきである。

1点目と2点目について、今後IOCのオリンピック研究センターが主導してオンラインプラットフォームが形成されることになる。そこでは、本号でも報告されているような筑波大学や附属学校群における教育実践が有力なコンテンツとなることが期待される。3点目については、オリンピックに関する研究・教育が必ずしも欧米に限るものではなく、むしろアジアや日本（東京2020大会のレガシーの観点を含め）にだからこそそのオリジナルな視点で推進されることを支持するものといえる。

総じて、2021年の東京大会を開催した日本、東京、そしてその唯一のOSRCとしてのCOREへの期待感が高く、特に大会レガシーに関する研究、それを生かした教育の有効性を考え発信することは、今後のCOREの重要な使命となると感じられた。実際に、2032年の開催国となるオーストラリアのクイーンズランド大学等とは、COREが東京大会に向けてスポーツ庁や大会組織委員会などといかに連携したか、OSRCとしての立ち位置に関する意見交換、情報提供を始めている。本コロキウムでの情報と構築された各国・地域のOSRCsとのネットワークを活かし、国際的なムーブメントの発展に寄与していきたい。



写真1. コロキウム参加者（IOC Headquarter 前にて）



写真2. グループワークの様子（2日目）

The 4th International Colloquium of academic Olympic Studies and Research Centres

PROGRAM – JULY 22nd and 23rd 2024

- See at the end the program of the visit to Lausanne on July 24th, organised by the IOC Olympic Studies Centre

JULY 22nd – WELCOME, OPENING AND INSTITUTIONAL SPEECHES

(room: amphitheatre MSHE)

- 9:30 - 10am : Welcome and registration
- 10 - 10:15am : **Opening speech** by Macha WORONOFF, President of the Université de Franche-Comté
- 10:15 - 10:30am : **Welcoming words** by Eric MONNIN, Host organizer, Vice-President of the Université de Franche-Comté à l'Olympisme and Director of its Centre d'études et de recherches olympiques universitaires
- 10:30 - 11am : **"The Legacy of Paris 2024 Olympic Games"** by Marie BARSACQ, Executive director for Impact and Heritage Paris 2024
- 11 - 11:30am : **"The IOC Olympic Studies Centre"** by Maria BOGNER, Head of the IOC Olympic Studies Centre and Nuria PUIG, Manager Senior, External relations and academic programs
- 11:30 - 11:45am : **Opening words** by Taro OBAYASHI, Member of the organizing committee of the 3rd International Colloquium of academic Olympic Studies and Research Centres (University of Tsukuba, Japan) and Stephan WASSONG, Chairman of the Steering Committee of the 4th Colloquium (German Sport University Cologne)
- 11:45am - 12pm : **Logistical information about the colloquium** by Eric MONNIN and Antoine GUILLEMET, Université de Franche-Comté

12 - 2pm : Lunch (Centre Diocésain Espace Grammont)

JULY 22nd – AFTERNOON SESSION

(room: amphitheatre MSHE)

- 2 - 3:30pm : **Network of the Academic Olympic Studies and Research Centres (OSRCs) : Summary of the OSRCs Annual Reports 2023 and Update on the Activities of the Network**
Nuria PUIG and Laila GINTZBURGER, IOC Olympic Studies Centre

3 :30 - 4pm : Coffee Break

(room: Exhibition Hall)

- 4 - 5:30pm : **"The Nature of Olympic Studies"**
Moderators : Emilio FERNANDEZ PENA, Autonomous University of Barcelona (Spain) and Nicolas CHANAVAT, University of Rouen Normandy (France)

5:45pm : reception by Christine BOUQUIN President of the Doubs département
(address: 7 avenue de la gare d'eau 25000 Besançon)

5:30 - 7pm : Free time

7 to 9 pm : Official Diner (Croisière Gourmande)

JULY 23rd – MORNING SESSION

(room: Exhibition Hall)

- 9 - 10:30am : **Teaching Initiatives and Activities Organized by the OSRCs**
Moderators : Maria BULATOVA, National University of Ukraine on Physical Education and Sport (Ukraine) and Nelson SCHNEIDER TODT, Pontificia Universidade Católica do Rio Grande do Sul (Brazil)

10 :30 - 11am : Coffee Break

- 11am - 12:30pm : **Collaborative Research Conducted by the OSRCs and Strategies for Strengthening the Dissemination of Research Results**
Moderators : Jung Woo (Jay) LEE, University of Edinburgh (Great Britain) and FAN Hong, Shanghai University of Sport (People's Republic of China)

12:30 - 2:30pm : Lunch (Centre Diocésain Espace Grammont)

JULY 23rd – AFTERNOON SESSION

(room: Exhibition Hall)

- 2:30 - 4pm : **Collaboration of the OSRCs with the Olympic Movement**
Moderators : Angela SCHNEIDER, The University of Western Ontario (Canada) and Richard BAKA, Victoria University (Australia)

4 – 4:15pm : Coffee Break

(room: amphitheatre MSHE)

- 4:15 - 5pm : **Outcomes and Recommendations of the Colloquium and Closing Words** (Members of the Steering Committee and Moderators)

5:15pm : reception by Anne VIGNOT Mayor of Besançon (address: 2 Rue Megevand, 25000 Besançon)

5 - 7:30pm : Sightseeing around Besançon (La Citadelle, UNESCO World Heritage Site)

7:30 - 9:30pm: Official Dinner (Restaurant le Sauvage) offered by the IOC Olympic Studies Centre

JULY 24th – VISIT TO LAUSANNE

7:30am: Departure from the Université de Franche-Comté to Lausanne by bus

09:45am: Arrival at the IOC Headquarters, visit and official picture

11:45am – 12pm: Transfer from the IOC Headquarters to the Olympic Museum and the IOC Olympic Studies Centre

12.30 – 2pm: Official picture and Lunch at the Restaurant of the Olympic Museum

2 – 4pm: Visit of the Olympic Museum's Collections and the IOC Olympic Studies Centre (including the IOC Historical Archives)

4 – 6pm: Free tour of the Olympic Museum

6pm: End of the visit (from this point, transport and accommodation to be organized by the participants)



北京・リオデジャネイロオリンピックで銅メダルを獲得した、中村美里選手をお呼びして、特別授業を5年生と1年生に行った。

【時程】

- 11：00～12：00 講堂で講演
- 12：10～13：00 1部5年で給食
- 13：20～14：00 体育館で実技体験

【講演について】

中村美里選手が柔道を始めたきっかけとその後の決断についてからお話を始めていただいた。小柄だった、彼女がいかにか努力を積んだのか、もっと強くなるために自分で寮に入ることを決めたこと、子ども達にも、何かをする時に、自分で決めていくことの大切さを伝えていただいた。

また、北京で銅メダルに終わり、悔しく、インタビューでも、「銅は銅なんで。」とその感情を露わにしたこと。その後、大きなけがをして、選手生命が危ぶまれた中、多くの人に支えられたこと。そして、その後のリオデジャネイロオリンピックでも銅メダルに終わったこと。この時の気持ちを問われると、子ども達は「悔しかったに違いない」と言ったが、中村選手は「こんなにうれしい銅はない」と答えた。子ども達には驚きだったようだ。続けて、多くの人に支えられて、再びオリンピックという舞台に立つことができた。感謝の心でいっぱいだったと伝えてくれた。

【実技体験について】

まずは、簡単な準備運動から始まった。体育館を、中村選手の号令に合わせて走ったり、向きを変えて走ったりなど、シンプルかつ多彩なバリエーションで、低学年の子ども達もたくさん動くことができていた。

その後の柔道の実技は、体育館にマットを敷き詰めて行った。主に受け身の練習をした。1年生も、5年生もそれぞれ楽しく活動に取り組むことができた。その後、中村美里選手と組み手の練習をして、中村選手を1年生や5年生が投げてみる（とても上手に回って投げられてくれた）などし、子ども達から歓声が上がっていた。

最後に、北京とリオデジャネイロオリンピックのメダルをみんなに触らせてくれ、子ども達も興味津々であった。非常に、有意義な時間を過ごすことができた。



オリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属中学校 秋山 和輝

1. 背景

本校では継続的なオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）の推進を図り、昨年度の実践の積み上げになるような取組みを計画した。具体的には鳥居選手の継続的な講演開催、新しいスポーツの体験活動の保証が挙げられる。また今年度はパリオリンピック・パリパラリンピックの開催年度であったため大会に出場した混合 42.195 キロ競歩リレーの高橋和生選手、ブラインドサッカーサッカー日本代表の鳥居健人選手を招聘し、講演（実技講習含む）を開催した。オリンピック・パラリンピックの開催年度であったため生徒が大会を身近に感じるだけではなく、パリ大会に出場した選手がどのようなことを感じ、経験されたのかを聞くことができる貴重な機会となった。それぞれの講師の方々から伺った話が生徒の日常生活に関連するように講演の前に事前学習を行うなど学習が充実するための取組みを行った。他にも本校のオリパラ教育を授業実践、総合学習、特別活動の3つに整理して活動を報告する。

2. 目的

本校のオリパラ教育の活動報告を目的とした。そのための各取組みを以下のように設定した。

- (1) 保健体育科の授業における実践事例
- (2) 総合学習の取組み
- (3) 特別活動での取組み

3. 実践報告

(1) 保健体育科の授業における実践事例

本校では計画的、継続的にオリパラ教育を実践している。今年度は講師として競歩の高橋和生選手にご講演をしていただく前に陸上競技の単元で競歩を取り扱った。

①競歩体験（第1、2学年）

競歩のルールをどの程度、理解しているだろうか。専門的に関わっている方や陸上競技が好きな方以外はルールだけでなく、走ることと歩くことの違いを明確に言える人は多くはないと思う。本校では講師をお招きして講演をしていただく際にその講演が一過性のイベントにならないように意識している。そのため今回の高橋選手の講演に関しても陸上競技の授業の中で「競歩とはどのようなスポーツであるのか」、「ルールはどのようなことがあるのか」を理解した上で体験し、難しさを感じると共に生徒が競歩に関心を持てる時間を意図的に設定してきた。そのため当日は生徒から高橋選手へたくさんの質問が寄せられた。自分が当事者として体験したからこそ難しさや楽しさを感じることができ、競技への関心が高まったのだと言える。

(2) 総合学習の取組み

今年度は第2学年の総合学習で「スポーツを捉え直す」、第3学年の総合学習では「スポーツを科学する」をテーマに設定し、探求活動を進めた。

①海外からの視察

10月17日木曜日にカンボジア教育・青年・スポーツ省、現地の教育局、管理職、教員の合計13名の方々に本校の教育活動の視察があった。カンボジア王国の小学校から高等学校までの全ての生徒が学ぶ「PE for All」プロジェクトの一環として学校の視察をハート・オブ・ゴールド（NPO法人）よりご依頼いただいた。翌週末に運動会を控えている中での授業視察であったため運動会練習の様子をご覧いただき、実際にむかで競走を体験していただいた。午後は第2学年の総合学習の授業にもご参加いただき、テーマである「人はなぜスポーツをするのか」について生徒の発表の様子をご覧いただいた。その際に自動翻訳機能を使用し、生徒の発表後に質疑応答が活発に行われた。



写真1. デスカッションの様子



写真2. むかで競走体験の様子

②マイナースポーツ体験

昨年度と同様に第2学年の総合学習では競技人口の少ないマイナースポーツを行う機会を確保した。生徒が理解しているスポーツはいかに狭義なものであるのかを理解した上で、様々なスポーツが存在すること、そのスポーツを体験すること、そのスポーツ自体（起源やルール等）を理解すること、そのスポーツの魅力を仲間に伝えることを活動の中で行った。生徒が主体的に取り組めるようにグループで調べたことを仲間に伝える活動の際には生徒がコートの準備やマネジメントを行った。はじめて行うスポーツはほとんどであり、活動に参加するみんなで楽しむためにはどのようにルールやコートを工夫すればよいのかをグループで検討する時間は大変活発に進められた。取り扱ったスポーツはタグラグビー、フィールドホッケー、インディアカ、シッティングバレー、キンボールである。

キンボールとは直径1.2 mあるボール（中身はゴム製）を落とさないように扱い、3チームで競う競技である。初めて触れる生徒が大多数であり、ボールに触れるだけでも笑顔がこぼれ、実際に競技を行うと歓声があがった。



写真3. 生徒がルール説を説明している様子

③オリンピックミュージアムの見学（第2学年、第3学年）

今年度はパリオリンピック・パリパラリンピックの開催年度であり、大会は始まる前に事前学習の一環として第3学年の総合学習でオリンピックミュージアムを見学した。他方で、第2学年は大会後の記録や実際に使用された物品を見学し、大会のレガシー（遺産）を考える機会として大会終了後に見学した。

資料を見るだけでなく、実際に体験する場所があり、充実した時間を過ごしていた姿が印象的であった。第2学年は大会後に訪れたこともあり、大会で使用されたウェア等の“生”の物品を見学することができた。

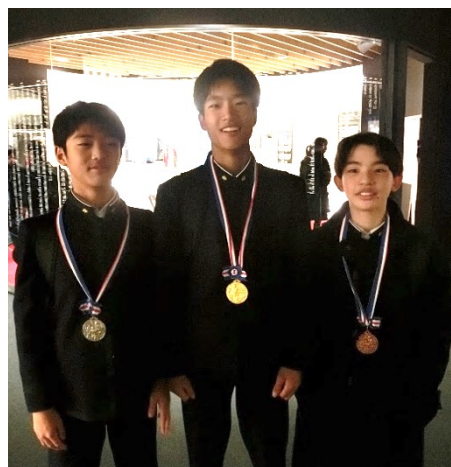


写真4. メダルをつける生徒

④総合学習における探求活動

総合学習の時間の中で生徒が自分で探求テーマを決め、そのテーマ、研究の目的に沿って探求活動を行った。第2学年は様々な体験活動から自分のテーマの立て方、決め方を学び、調べ学習を中心にレポートにまとめた。第3学年は自分のリサーチクエスチョンを定めるとともにその解決に向けて方法を検討し、実際にデータを入手する、分析する活動を行った。自分なりの

問いに対する結論を生徒自身の手で明らかにしていく過程は高尚なものであり、他の学習にも汎用できる力を育成できたと考える。以下、第2学年の生徒が設定したテーマの一部である。

- ・スポーツマンシップと暗黙の了解の違いと関係性について
- ・オリンピック男女平等に向けての日本の動き
- ・マグルにもできるスポーツ クディッチがオリンピック競技になる日は来るのか
- ・スポーツの奥深さを探る ～勝つだけがスポーツではない～
- ・オリンピックのスポーツとは ～eスポーツはスポーツに入るのか～
- ・柔道混合団体決勝 日本 VS フランス戦を各メディアはどう伝えたか

⑤ブラインドサッカーのお手伝い（第2学年総合学習参加希望生徒）

12月1日にLIGA.i ブラインドサッカートップリーグ第1節 free bird mejirodai 対 品川 CC パペレシアルのエスコートキッズに9名の生徒が参加した。エスコートキッズとして参加する前にブラインドサッカーの体験をするなどトップリーグの試合を観戦するだけでなく、ブラインドサッカーの関わる大変貴重な機会となった。



写真5. ブラインドサッカー体験の様子



写真6. 活動場面

(3) 特別活動での取り組み

本校ではオリンピックやパラリンピアンに講演いただく機会を継続的に設定してきた。今年度は第1学年と第2学年の生徒（約400名）を対象に混合42.195キロ競歩リレーの高橋和生選手、第1学年と第3学年の生徒（約200名ずつ）を対象に鳥居健人選手（ブラインドサッカー日本代表）を招聘し、ご講演いただいた。

①高橋和生選手のご講演

競技での挫折から目標設定の仕方を変え、オリンピックになられたお話は生徒に大変刺激的であったと思う。就職時に一般会社に勤めるか、競技スポーツを続けるかという葛藤や日本代表になるための覚悟を通した話を聞けることは大変貴重な機会となった。大事にしてもらいたいこととして「人との出会いを大事すること」、「自分にもできると信じることは」スポーツに限らず、日常生活でも大切にできることであると感じた。

さらにパリ大会の宿舎の様子や大会当日のスケジュール、実際のレースの様子など普段は聞くことができない内容を沢山お話いただいた。



写真7. ご講演の様子

生徒の感想（一部抜粋）

- ・本当に人との関係を大切にしていきたいと思った。目標にずっと届かなかったが、人とのつながりによって「オリンピックに出る」という目標叶えられていた。私も、大きい目標をもちそれを信じて日々努力したいと思った。
- ・人間誰にも得手不得手があるため、自分に合った活躍の場がきっとどこかにあるのだなと思った。その場を見つけるために私たちは日々勉強や運動を欠かさずしている。将来何をしたいのか、深く考えさせられる講演会だった。
- ・私自身、自分を信じ続けられない、私には程遠い目標だと感じ自分には無理かもと思ってしまうことが多いので、今回の高橋選手の講演を受け勇気を持つことができた。私もスポーツ関連で大きく2つ、すぐの将来と近い将来で目標達成したいことがあるので、自分の可能性を信じて走り抜けたと思った。

②鳥居健人選手のご講演

昨年度に引き続き鳥居選手に継続的にご講演いただき、今年度で継続して3年間目である。今年度は第1学年と第3学年にご講演をしていただいた。第1学年では講演をしていただいた後に実際に生徒がブラインドサッカー体験をする時間を確保し、第3学年では講演をいただいた。パリパラリンピックに出場された際のお話やこれからのお話など鳥居選手には学年によって内容や活動を流動的に変更していただき、充実した活動が行えた。継続的に関わっていただいた第3学年の講演の中には3学年関わってきた関係性の中で卒業生へのエールもいただき、大盛況の中終了した。



写真 8. 対話形式の様子（第3学年）



写真 9. 実技講演（第1学年）

4. 成果と課題

引き続き継続的な講演を今年度も実施に至った。パリ大会が開催されたので講師をお招きする時期や内容は何度も議論を重ね、検討してきた。教科だけではなく、学校全体の教育活動と絡めオリパラ教育を推進してきた。生徒がどのように学びを深めたのか、その後の学校生活にどのように活きているのかなど生徒の感じたことや学んだことを経年的に確認していく必要がある。今後はさらにオリンピック・パラリンピック大会自体の学習を進めると同時にスポーツの価値教育などスポーツに関連する内容を多岐にわたって取り扱いたいと考える。

附属高校の取り組み

附属高等学校 鮫島 康太

1. 体育実技において

附属高校では、オリンピズムに関連する内容については、日常の教育活動の中に盛り込んでおり、意識的に様々な取り組みを行っている。

オリパラ種目である陸上競技の中で、「トラック種目」と比較してもフィールド種目の「跳躍」や「投擲」は注目度が高くはない。2025年9月には東京で「世界陸上」が開催される。生徒の興味関心を高めるためにも、今年度は「走り高跳び」の支柱とバーをオリパラ予算で購入し、授業を実施した。さらに、投擲種目「円盤投げ」を4回の授業に取り入れ実施した。この二つの種目は、適切な技術指導だけでなく、安全管理の部分でより一層の注意が必要となる。陸上競技を専門とする教員が計画的かつ組織的に準備し実施した授業内容であり、生徒たちも自身の身体能力を駆使して課題に挑戦する様子が確認できた。生徒自身の記録とトップアスリートの記録を比較した際には驚きの声が多数上がっており、人間の可能性や努力の大切さを伝える授業であった。

また、バスケットボール単元では東京五輪より正式種目となった「3x3」を導入。学校体育では当たり前に実施されるバスケットボールであるが、走力不足やパスの失敗から苦手意識のある生徒は多い。今回は、5対5のフルコートゲームで課題となっていた様々な様相を改善すべく、授業実践を行なった。詳細は筑波大学附属高校研究紀要第66巻に掲載予定である。

三年生選択種目（男女共習）では2028年ロサンゼルス五輪種目となる「クリケット」を実施した。この単元では、授業の企画・運営などを生徒が主体となって行い、生涯スポーツの現場において必要となる素養を育むことが一つの目的である。したがって、クリケットも生徒が企画・立案し実施に至っている。事前準備の段階から日本クリケット連盟と連携し、講師として日本代表選手を招聘することができた。日本には馴染みのないスポーツであるが、世界的にはとてもポピュラーであり、生徒もその魅力に気づくことができたようである。

上記以外にも「サッカー」や「柔道」、「ラグビー」等においても、体力の向上や技能の習熟に加えて、さらに多くの要素を盛り込んだ授業づくりとその発信を心がけていきたい。



【写真①】三年選択体育「クリケット」の様子

2. 体育理論などの授業

保健・体育理論の授業では、オリンピック・パラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。特に経済や政治との関りについて生徒の関心も高かったように感じる。これらの問題は保健体育科だけではなく他教科でも取り上げられ、生徒は様々な観点からオリンピック・パラリンピックをとらえる良い機会となった。来年度は東京で初めてデフリンピックが開催されるが、今のところ生徒の興味関心はあまり高くない様子であった。ぜひ授業内容に取り入れて、生徒の琴線に触れることができると考えているところである。

3. 筑波スタディとしての取り組み（総合的な探究の時間）

「筑波スタディ」では、一年次ではリサーチクエスションの吟味や研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習し予備研究を行う。二年次で課題研究を行い、最終的には論文を作成するというものである。二年次の大まかな流れは、4月にオリエンテーション、5月に研究テーマの焦点化を行い本格的な研究活動に入っていく。毎年、オリンピック・パラリンピックやスポーツ全般に関連することが研究題材として複数挙がってきている。

4. 学校行事として（スポーツ大会）

オリンピズムの根本原則に、「友情を育みながら競争的なスポーツに倫理的に取り組む」という内容がある。その実践の場としては、本校で行っている「スポーツ大会」が挙げられる。

コロナ禍では学年ごとの実施だったが、昨年度から全校生徒同日「一斉開催」となった。今年度は「バレーボール」「フットサル」「バスケットボール」が球技大会形式で1日半をかけて行われた。2日目の午後には運動会形式のクラス対抗種目で競った。一学年が「障害物競走」、二学年が「クラス全員リレー」、三学年は「棒うばい」であった。これらに加えて1組～6組をそれぞれのチームとして、その中から選手を集め「代表リレー」を行った。

他学年の生徒を応援したり、他人から応援される喜びや楽しさを感じる表情、互いにアドバイスし合う姿や健闘をたたえ合う姿はオリンピズムを体現していると言える。

5. 日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムへの参加

2年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」は世界中から集まった高校生同士がスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリンピズムを学ぶ。「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム」は「国際 YF」が開催されない年にも実施され、国内の高校生がオリンピックの理念やオリンピックムーブメントの現状を学び、社会課題を解決するヒントを探る。このイベントには本校からも毎年参加者が出ている。

6. その他

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリンピズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまでも受け継がれている。校内での日常活動に加えて、他校との伝統ある部活動定期戦なども実施されている。

活動報告

附属駒場中・高等学校 登坂 太樹

1. 日本オリンピックミュージアムへの訪問

令和6年11月6日 東京都新宿区にあるオリンピックミュージアムに希望者で訪問した。中学1年生2名と3名が参加しました。今回は昨年度、高校2年生の課題研究で開催企画したオリンピック教育の一環で訪問した高校2年生が作成したワークシートを使いながら、学習をして回った。ミュージアムに入るとまず目を引くのが、2024年に開催されたフランス・パリオリンピック・パラリンピックの特設コーナーでした。ここでは実際に選手が使用した用具やユニフォームが展示されており、試着できるものもあり、生徒は積極的に試着していた。まずその競技がどのような競技なのかがわからない状態で、競技名を知る上でも貴重な機会になったのではないかと思います。また、過去のオリンピックのマスコット（実物）が置かれているコーナーもあり、ここでは実際に触れることができた。中には1972年ドイツ・ミュンヘンオリンピックのマスコット『ヴァルディ（Waldi）』があり、生徒たちはその時代からオリンピックがあり、かつマスコットもあったのかと実感していた。

ミュージアムの2階ではまず歴代の金メダリストの写真が並んでおり、生徒たちはそれを食い入るように見ており、知って



いる名前があるかどうかを探していた。中に進むと、古代オリンピックから現代につながる流れを紹介したコーナーがあり、ここからは先輩が作ったワークシートまとめながら学習していった。またその反対側には第1回のギリシャ大会以来のトーチが置かれており（第1回はレプリカそれ以外は実物）ここではしきりに写真を撮っていたことが印象的である（館内は写真撮影可能）。

次に1964東京オリンピックでの聖火リレーのコースが図示されており、2020オリンピックでは本来の姿では果たせなかった聖火リレーが、1964ではどのように進められていったのかを学習した。

オリンピックゲームスコーナでは、ビジュアルを使った体験コーナーがあった。ここでは「競技に共通する動きを体験し、オリンピックの身体能力に挑戦。（オリンピックミュージアム公式HPより）」があり、各種の競技の体験をして実際のオリンピック選手の記録と比較してその凄さを感じていた。



生徒の感想では「今まではオリンピックを見るだけで過去のオリンピックや協議に関する知識はあまりなかったが、スポーツがもたらす事例について勉強することができた。2026年ミラノ・コルティナオリンピックが楽しみになった。」「オリンピックに関する展示が興味深かった。オリンピックの記録が自分の2倍ぐらいでおどろいた。」「それぞれに特化した人々がオリンピックに出て戦っていたと思うと感動した。オリンピックに野球が戻ってほしい。」

2. 講演会：スポーツデータサイエンス入門

7月8日（月）には、高校2年生の課題研究の一環として、保健体育科主催の講演会を実施しました。本講演会では、以前本校で勤務されていた徐広孝先生（静岡産業大学准教授）を講師として招き、「スポーツデータサイエンス入門：アプリ開発とデータの測定・分析を体験しよう！」というテーマでご講演いただきました。参加対象は、保健体育科課題研究選択者と、理科（物理）選択の生徒です。

徐先生は、スポーツのデータ分析に関する基本的な知識から、Webアプリケーションの開発方法に至るまでを幅広くご教示いただきました。

生徒たちは、スポーツデータの収集から分析、そして実際にWebアプリを使用して分析する過程を体験することができまし

た。以下は、生徒から寄せられた感想です。

「スポーツを見る際にも、データを分析するという視点を持つことで、より深く理解できるようになった。」

「アプリの開発過程が非常に難しかったが、その分やりがいを感じた。」

「プログラムやアプリ開発の実際を体験することができ、非常に有意義な時間だった。」

この講演会を通じて、スポーツデータサイエンスに対する興味を深め、将来的な学問・職業の選択肢を広げる機会となったことを確認できました。

3. 講演会：トップアスリートの実践するスポーツ科学の魅力と実践



7月12日（金）には、株式会社ハイクラス代表取締役である位高駿夫氏をお招きし、「パリ五輪選手も学ぶ！トップアスリートの実践するスポーツ科学の魅力と実践！」というテーマで講演を行いました。本講演では、スポーツ科学における遺伝の影響とアスリートの身体的特徴に焦点を当て、実技としてロコモティブシンドロームのチェックも行われました。

位高氏には、遺伝とスポーツの能力との関係について深く掘り下げ、筋肉の構造が遺伝子によって決定されていることや、特定の遺伝子型がアスリートの成功にどのように影響を与えるかについて説明していただきました。また、ロコモティブシンドロームを実際にチェックする活動を通じて、生徒たちは自身の体調や健康

管理の重要性を再認識しました。参加した生徒たちからは以下の感想が寄せられました。

「遺伝子がアスリートの能力に直接関係していることに驚いた。」

「スポーツ科学に関する多角的な視点を得ることができ、とても有意義だった。」

「自分の体調を管理する大切さを改めて感じた。」

本講演会は、生徒たちに遺伝や身体管理の重要性を学ばせ、トップアスリートのトレーニング方法や科学的アプローチに触れる貴重な機会となりました。

スポーツの価値を多くの競技から考える

附属坂戸高等学校 渡會 愛梨

1. はじめに

本校では、マイナーなスポーツからメジャーなスポーツまで幅広くスポーツの価値を考えたり、仲間との協同や自分自身の身体を知り、知り得たことを言語化し表現していくことを目標に授業で取り組んでいる。今回は紹介するのは、コーフボールと陸上における授業目標や実践方法、生徒の変容を述べていく。

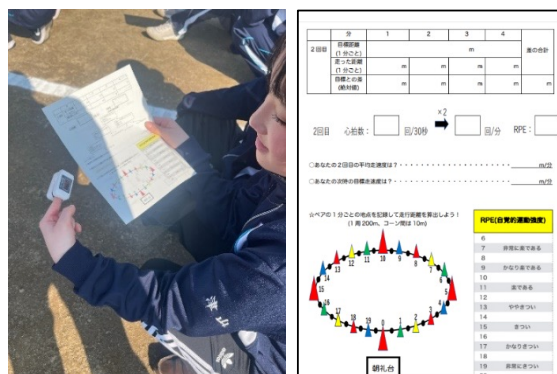
2. 3年体育『コーフボール』

3年生の体育の授業は3つの種目、コーフボール、アルティメット、ベースボールの選択制で授業を展開した。コーフボールは身体の接触がなく落ちついてパスができる所から運動が苦手する生徒にも活躍の機会のある授業であった。また、同性は同性を守るというルールから本校もそのルールを用いたが、女子生徒のみ受講であった為、襷を掛けてわかる性別の区別をつけた。多様性の時代の中で正規のルールでスポーツ展開する意味を考えながら授業を行った。



3. 1年体育『陸上』

単元目標「自分に合ったペースを保って走れるようになる」と立て、オリンピックのモットーから「他人との比較ではなく自分自身が向上すること」より、速く走ることよりも自分自身を知ること意識して授業に取り組んだ。心拍計を使用して、走りのリズムを掴むために各自にメトロノームを持たせて、自らの心地よい走りとはどのような走りか？生涯運動を親しむためにどのような意識・知識・行動をとるべきかを座学や実技を交えて展開した。



4. 授業を通しての生徒の感想

コーフボール・・・キャッチしたボールを無理やり奪われたり接触することがないので球技に恐怖心がある人でも楽しめるスポーツであった。ボールを持った時に呼名をしパスをするので、コミュニケーションも図れるし、平和にスポーツを展開できた。陸上・・・心拍数や目標距離の差は大きいが他の人に抜かされてもスピードを変化させることはなく、自分が楽しいと思える速さで走っていた。疲れたという感情ではなく、やりきった！や心地よかったと心も体も暖かくなったと実感した。

5. まとめ

学生が自らの目標を設定し、達成感を得る機会を提供できたとともに異なる国の文化やスポーツを学ぶことで、国際理解を深めることができた。このように、オリンピック教育と体育授業は相互に補完し合い、学生の成長に寄与する重要な要素であることを強調することができた。

パリパラリンピックを中核に据えた特色のあるオリパラ教育の展開

附属視覚特別支援学校 山本 夏幹

パラリンピックイヤーとなった2024年。本校ではパリパラリンピックを核としたオリンピック・パラリンピック教育を展開した。壮行会並びに報告会の様子について報告する。また、2028年にロサンゼルスで開催されるパラリンピックで初の実施競技に採用されたパラクライミングに取り組んだ。

1. パリ2024パラリンピック競技大会壮行会&報告会の開催

2024年7月11日（水）に本校を会場にパリパラリンピックに出場する選手を激励する気持ちを込めて壮行会を開催した。当日は競泳代表の木村敬一選手、ゴールボール女子代表の安室早姫選手、高橋利恵子選手、天摩由貴選手、萩原紀佳選手、ブラインドサッカー代表園部優月選手、鳥居健人選手、永盛楓人選手が参加した。第1部では選手の皆さんから決意表明を、第2部では選手たちに生徒からの質問に答えてもらいながら、対話形式で会を進行した。生徒から『挫折を乗り越える方法』について聞かれ、天摩選手は「素直に落ち込んでたくさん寝て忘れる。自分に素直になってあげることも大切。」園部選手は「怪我から立ち直って、活躍する自分の姿を想像しながらリハビリや練習に励んでいる。」と語ってくださいました。壮行会の締めくくりとして、本校高等部普通科アスリート育成プログラム生で結成された応援団が中心となって、選手にエールを送った。



パリパラリンピック壮行会の様子

熱戦が繰り広げられたパリ大会の閉幕から4か月が経った12月に報告会を開催した。報告会には競泳代表の木村敬一選手、トライアスロン代表の米岡聡選手、ゴールボール女子代表の安室早姫選手、高橋利恵子選手、天摩由貴選手、萩原紀佳選手、ブラインドサッカー代表園部優月選手、鳥居健人選手、永盛楓人選手が参加した。今回参加した選手である米岡選手と木村選手のスピーチを抜粋する。

【トライアスロン・米岡聡選手】

大きな目標に向かってチャレンジすることは楽しいことだなと感じた。パラに出場できる選手は、ロードマップを考えて目標に向かってひたすら努力できる人。東京パラリンピック（銅メダルを獲得）でゴールテープを切ったとき、普段、感情が薄いのだが、自分の中に嬉しいと思う感情があると再発見したし、人生の財産になった。パリではメダルを持って来られなかったが、ステップアップできたと感じている。

【競泳・木村敬一選手】

東京大会まではたくさん量を泳いで、めちゃめちゃ筋トレをして、ものすごいご飯をたくさん食べて、とりあえずフィジカルを強化して海外選手に勝っていくぞと、練習をしていた。今回、水泳を改めて上手に泳ぐ練習をしてみて、まだまだ知らないことがたくさんあるんだと感じた。目が見えないと『やったことがない限り、知っているって言えない』と思っている。（皆さんも）やったことがあることを増やしてほしい。変な話かもしれないが、僕たちの家族は『目が見えないから、できないんじゃない？』と言ってくることも結構ある。家族だから『そのへんにしといたら？』と言ってくることもある。でも、皆さんは、家族が思っているよりやれることはたくさんあると思うし、それをやらせてくれるのがこの学校だと思う。皆さんも先輩や先生の力を存分に借りて、自分がやりたいと思っているものに向かって思い切り挑戦してほしい。



生徒のアテンドで選手は入場した

パラリンピックには4つの価値がある。『勇気』『強い意志』『インスピレーション』『公平』。本校には世界の舞台で活躍する『人』がいる。彼らが肌で感じた経験を本校に持ち帰って語ってくれることが、パラリンピックやスポーツの価値を『未来』に繋ぎ、視覚に障害のある子どもたちの『夢』を与える存在になると思っている。これからも本校の特色を活かして、オリパラ教育の充実を図っていく。

2. 中高体育実技『パラクライミング』の取り組み

2025年3月10日（月）に中学部1年生及び2年生、高等部普通科音楽科1年生及び2年生の授業にて、パラクライミングに取り組んだ。当日は特定非営利活動法人モンキーマジック代表で、ご自身も選手として国際大会でも活躍され、数々のメダルを獲得された小林幸一郎氏を講師として招き、生徒にパラクライミングの指導や魅力について語っていただいた。苦戦しながらも何度も挑戦する姿が印象的だった。今後も継続的に取り組んでいきたい。



パラクライミング体験の様子

3. ブラインドサッカー男女オーストラリア代表との交流

2024年12月12日（木）に本校高等部普通科音楽科3年生の有志生徒並びに中学部フロアバレーボール部の生徒が来日中のブラインドサッカー男女オーストラリア代表チームの選手・スタッフと交流した。高3生徒は英語を使ったコミュニケーションに挑戦し、学校紹介や互いの文化を紹介し合ったり、自身の興味関心のある分野テーマに積極的に会話する様子が見られた。豪州代表チームには同年代の選手もあり、互いにとって刺激的な時間を過ごせた様子だった。中学生は日本発祥のスポーツであるフロアバレーボールを紹介し、最後には混合チームで試合を行い白熱した戦いを通して交流を深めることができた。



豪州代表と中学生の交流

令和6年度「車いすバスケットボール」「ラート運動」体験の取組

附属聴覚特別支援学校 荒川 郁朗

1. はじめに

本校で継続的に行っている「車いすバスケットボール」(7年目)と「ラート運動」(9年目)の体験を今年度も実施することができた。この二つの種目は、ともに専用の用具を用い、また用具が大きいため、いただいている予算の大部分を、その運搬費に充てている。今年度「車いすバスケットボール」は小学部高学年の児童で、「ラート運動」は中学部の全学年生徒対象で実施した。

2. 車いすバスケットボール

12月20日(金)、小学部4・5・6年生男女20名の児童を対象に、車いすバスケットボール体験会を行った。以前は講師として、現役の車いすバスケットボール選手に来ていただいていたが、物価の高騰の影響で用具運搬のコストが上がり、講師謝礼を捻出することが難しい状況になってきたため、昨年度に引き続き、本校体育科教員の主導での体験会となった。

体験は昨年同様に競技用車いす10台と通常の車いす数台を準備し、授業2コマ分の時間で行った。通常の車いすは競技用車いすとの比較のために使用し、形や部品、動きの違いや乗り心地等の違いも確認した。競技用車いすの体験は車いすの基本操作、ランニングシュート、試合という流れで行った。競技用車いすが10台ということで、児童は二人組をつくって交代で基本操作を学んだが、昨年度の高等部生と比べて小学部生の場合、交代のための乗り換えにも若干の時間を要するため、内容を絞って実施した。車いすの基本操作は、単純な前進・後退、その場での回転などを行った。その後、ゴールに向かって進みながらパスを受け、そのままシュートするランニングシュートを行った。ゴールの高さは小学生の高さに合わせたが、使用球はバレーボールとした。理由としては、バスケットボールを使用した場合、在籍の小学部の児童が車いすの座ったままシュートをして、ゴールの高さに届かないこと、また動きが制限された状況で飛んでくるボールへの対応が十分ではなく、けがが予想されることなどが挙げられる。試合は男女合同4チームに分けて行った。車いすの操作や、座った状態でのパスやシュートなど、日頃の動きとは違う体験となり、得点は、ほとんど入らなかったが、参加した全児童が、集中して取り組んでいた。

車いすバスケットボールの実技体験を終えた児童から、以下のような感想が挙げられた。以下に一部を紹介する。

- ・普通の車いすより、競技用車いすの方が、スピードが出やすかった。
- ・気が付いたことは競技用車いすには、ブレーキがついていなかったこと。
- ・シュートをするときに、上半身しか使わないから、思うようにできず、難しかった。
- ・プロの選手の紹介写真を見たとき、上半身で車いすをたくさんこぐから腕の筋肉がすごかった。



写真1. 前進、後退の練習の配置



写真2. 試合開始時の様子

3. ラート運動

1月10日(金)、中学部生徒全員を対象に、ラート運動体験会を行った。

この体験会は9年目となるが、初年度より継続して講師として筑波技術大学の天野和彦准教授をお招きし、指導に当たって

いただいている。ラート運動は、日頃、経験できない姿勢や視界を体験できることから、本校生徒たちの多くがとても楽しみにしている体験である。

ラートは、例年同様に筑波技術大学保健科学部から借用した。学年ごとに体験を行い、当日は初めての体験となる1年生が2時間、2、3年生は前年の経験があるため、1時間ずつ行った。

全員が初めての体験となる1年生は、ラートの縁に乗って重心を真ん中に置きながら歩くトレーニングから始めた。その後、足を固定して横に揺らす動作、そして側転、後転、前転という順番で実技指導が行われた。各回転で大きなポイントとなる、目線、姿勢、ひじの使い方を意識してそれぞれの回転を体験した。身長別で2～3名のグループを作って交代で行ったが、バランスを崩すと横揺れが起きて、ラートが横転してしまうという危険性があるため、ラート1台に1名の教員が付くように配置した。恐怖心を拭い去ることができず、回転までたどり着かない生徒もいたが、「来年こそ回りたい」という前向きな気持ちで終えることができた。

2、3年生は、昨年度、一昨年度の経験から、すぐに感覚を取り戻し、中には連続技や捻りを加えた新技に取り組むことができた生徒もいた。限られた時間の中での体験のため、時間内にできるようにならない生徒もいるが、毎年継続して行っていることにより、次年度への期待をもたせることができていると感じる。

体験後のアンケートから、次のような生徒の感想が挙げられた。

- ・「天野先生が丁寧に教えてくれたので、怖かったけどできるようになって嬉しいです。」
- ・「普段、体が逆さまになることが少ないし、ハムスターのような気分になりました。」
- ・「ラートという名前も聞いたことがなかったけど、やってみたらとても楽しかったです。」
- ・「今年はケガでできなくてとても残念でした。皆が楽しそうで、ものすごくやりたかったです。」
- ・「ジェットコースターなどのアトラクションみたいで、とても楽しかったです。」
- ・「去年も体験したので、体が覚えていました。もっと難しい技に挑戦したいです。」
- ・「今回、全ての技にチャレンジできたので、他のことにもチャレンジしようと思いました。」

4. おわりに

今年度も、車いすバスケットボールとラート運動の体験会を行うことができた。毎年継続的に行ってきていることもあり、本校体育科教員もノウハウをつかみ、指導がスムーズになってきている。今年度は、動き始めを早め、用具の予約を早い段階で行ったため、滞りなく進めることができた。児童・生徒の期待もあることから、来年度以降も実施していけたらと考えている。



写真3. ラート側転の様子



写真4. ラート運動全体の様子

知的障害特別支援学校における、オリンピックとの交流・講演会を中心とした学び

附属大塚特別支援学校 宇佐美 太郎

1. 対象と目標（ねらい）

(1) 対象

知的障害のある幼稚部、小学部、中学部、高等部に在籍する幼児・児童・生徒

(2) 目標（ねらい）

本校に在籍する生徒は全員、知的障害児・者である。

知的障害という障害の特性上、家庭・学校以外の場所に一人、もしくは友達同士で出かけることは少なく、幼児児童生徒の行動範囲が学校と家庭（最近では放課後デイサービスなどに通っている生徒も多い）のみに限られてしまうことが多い。また、興味関心が偏っていたり、ルールの理解が難しい幼児児童生徒が多く、自ら進んでスポーツに取り組んだり、情報を得たりすることも難しい。そのため健常者と比較すると、スポーツをしたり触れたりする機会は圧倒的に少なく、スポーツに関する知識も少ないと言える。

そこで、オリンピックイヤーである本年度は、オリンピック・パラリンピック教育を通して、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を高めること、将来の健康的な生涯スポーツ社会への参加に向けて、①スポーツへの興味関心を高めること、②様々なスポーツを体験すること、③基礎的運動能力の向上を目標に実践を行った。

2. 内容

(1) 小学部の取り組み「タグ柔道をしてみよう」

小学部はな組（1・2年生学級）は、半分の児童が昨年度の交流・講演会に参加している。また、全校の幼児児童生徒に通知した「パリオリンピック、永瀬選手を応援しよう！」というお便りを受けて、パリオリンピックでの永瀬選手の活躍をテレビなどで観戦している児童もいた。そのため、11月に行われた交流・講演会をとっても楽しみにしており、会においては昨年度交流を行った2年生4人が柔道着を着て永瀬選手と共に手を繋いで入場をさせていただいたり、写真を撮らせていただいたりして、楽しみながら交流・講演会に参加することができた。

交流会で行ったタグ柔道がとても楽しかったようで、児童から「もっとやりたい！」という声が上がるとなり、体育の授業で取り組むこととなった。

知的障害があるため、すべての児童がルールを理解して競技に取り組めたわけではないが、嬉しそうに相手のタグを取ったり、時には渡してしまったりというように、それぞれの楽しみ方でタグ柔道に取り組む姿が印象的であった。また、畳に上がる前に礼をし、相手と対峙した時に礼をするという、中学部のタグ柔道の授業でも大切にしている礼儀作法の基礎についても、取り組みの中で経験をすることができた。

(2) 中学部の取り組み

①保健体育科「作法を知ってタグ柔道を楽しもう」

学習の集団は、中学部1～3年生全員（16名）で行った。全授業時数は8時間で、永瀬選手との交流・講演会に合わせて、令和6年11月から12月にかけて実施した。タグ柔道を行う前に、左前や帯の締め方など正しい道着の着方や立礼、座礼、左起右座など基本的な礼儀作法の学習を行いました。

また、本単元を実施している期間に、講道館（東京都文京区）を2回訪問し、より専門的な立場の方からご指導をいただくことで、基本的な礼儀作法の意味から柔道の理念まで学習することができた。実際に柔道着を着用し、講道館の柔道場でタグ柔道の練習をするとともに、講道館の師範の方から柔道の礼儀作法や受け身、投げ技などをご指導いただいた。

講道館で学習を積んだことで、日頃から関わりが少なかった武道の楽しさや伝統的な考え方を知ることができ、学校における保健体育の授業においても意欲的に取り組もうとする姿につながった。また後述する交流・講演会においても、永瀬選手とのタグ柔道による試合を楽しんだり、講演会の内容の一つであった「柔道 MIND」についての理解進化につながったりした、良い学習機会であったと考える。



講道館での練習の様子

②保健体育科「タグラグビーをしよう」

本校発案のアダプテッドスポーツであるタグ柔道は、タグラグビーに着想を得て考えられたものである。そのため、タグを取ることが目的や手段であるというルールが似ている。そこから、タグ柔道に慣れ親しんでいる生徒たちにとって、タグラグビーは知的障害があっても親しみやすく、ルールの理解もしやすいのではと考え、新たな競技を経験する良い機会としてタグラグビーを実施した。

実際の授業では我々が想定していたように、最初から戸惑う様子もなく学習に取り組む姿が見られた。事前学習として、競技の様子を動画で視聴し、ボールの取り方、投げ方等の練習を生徒同士で行った。ラグビーボールは、普通のボールに比べて「持ちやすい」という生徒達の感想があった。相手のタグを取ったときに、大きな声で「タグ」と言い、タグを取られた生徒は立ち止まるルールがあるため、これらの動き方について繰り返し練習を行った。ゴールを決めるときには、ラインを超えて「トライ」と大きな声で伝えることで喜びや達成感を得ている姿が多く見られた。相手にタグを取られないようにどのようにパスをつないでゴールを決めるか、班の友達と一緒に作戦を考えながら取り組むことができた。



「トライ」と大きな声で伝える様子

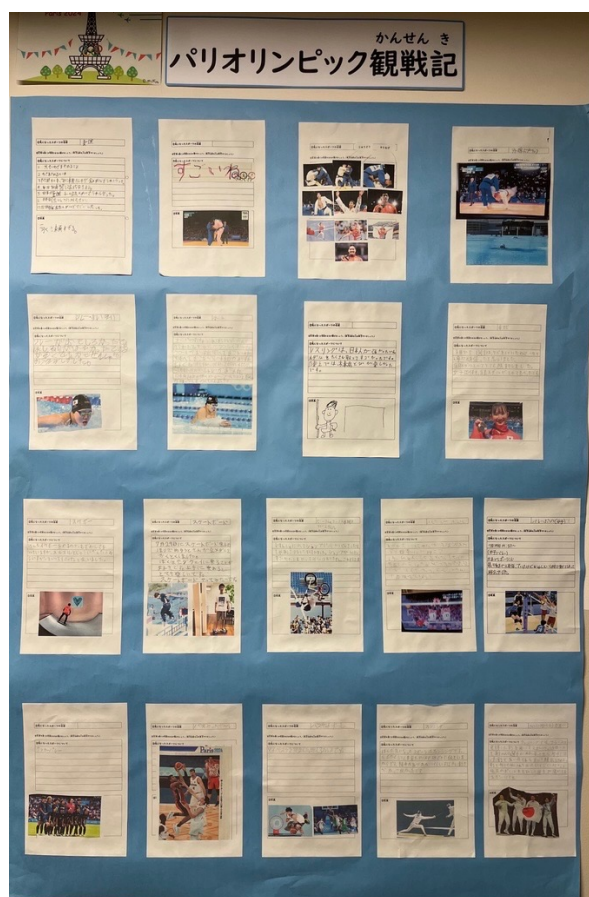
(3) 高等部および全校の取り組み

①オリンピック・パラリンピックについての調べ学習と観戦記・ポスター作成

本校高等部の保健体育科は、高等部全体（1～3年、計22人）で学習を行っている。保健体育科では2024年7月から行われたパリオリンピック・パラリンピックに向けて、オリンピック・パラリンピックで行われる競技はどのようなものがあるのか学習を行なった。まず事前に情報を生徒に提示せずに、生徒自身が好きな競技や経験したことがある競技が行われるかなど生徒自身の経験と結びつけながら、どのような競技があるのか想起させる問いかけを行った。

日頃から、プールによく行く生徒からは「水泳が行われるのではないか」、スケートボードで遊ぶ生徒からは「東京オリンピックからスケボーが増えた」などの意見が出た。また、保健体育の授業で経験したことがあるサッカーやバレーボール、バスケットボールなどもオリンピックで行われているという意見が出た。このように知的障害のある生徒にとって自分の経験から想起したり考えたりすることは、非常に有効な指導の手立てであると考えている。

オリンピック・パラリンピックでの種目を考えた後に行われる時期を予告し、夏季休暇中にオリンピックを観戦し、レポー



ト作成を行うよう課題を設定した。課題の内容は昨年度も本校で交流学習を行い、今年度も交流学習のため来校していただくことが決まっていた柔道 81kg 級の永瀬貴規選手の試合を観戦することと生徒自身が興味関心を持った種目を見てレポートに取り組むこととした。レポートは、生徒が関心を持ち、観戦したスポーツについて写真を貼るか、文章を書いてくるか選べるように設定した。

提出されたレポートは様々な競技についての記載があった。家庭でセグウェイを使って遊ぶことがある生徒からは、「僕が普段乗っているセグウェイと似ているスケボーをやりたい」という意欲的な意見が挙げられていた。また、フェンシングを取り上げた生徒は「競技を見るのはかっこいいが実際にやるのは怖い」という競技に関する感想を記述していた。オリンピックの観戦を通して、実際にやったことがない競技であっても想像しながら書いたり、自分の経験から近いことと結び付けて書いたりすることができた。

昨年度にもオリパラ交流会で来校してくださった永瀬選手に関心を持っている生徒も多く、新聞記事やテレビでの様子を写真で記録し、スクラップブックを作成していた生徒もいた。また、文字を書くことが難しい生徒は、普段から取り組んでいるスポーツの写真やテレビで観戦している様子の写真をワークシートに貼って提出していた。

二学期に入り、特別活動（委員会）の中でもオリンピック・パラリンピックについての学習を行なった。特別活動（委員会）の広報委員会では「ニュースおおつか」という新聞を作っている。ニュースおおつかのトピックスとしてオリンピックとパラリンピック、柔道を取り上げた。それぞれのトピックスについては生徒がタブレットで調べて記事を作成した。作成した記事は高等部の廊下で掲示と本校のホームページで公開した。この広報委員会で作成した記事は永瀬選手との交流・講演会時にポスターとして印刷し、その会場内で掲示を行った。

②オリンピックとの交流・講演会

交流・講演会に向けた高等部全体での取り組みとして、学級活動の時間に永瀬選手の試合を動画で振り返りながら永瀬選手への質問を各クラスから一つずつ考えた。昨年度も永瀬選手が来校していること、オリンピックを夏休みにリアルタイムで観戦していることから生徒は非常に高い関心を持って、質問を考えていた。

交流・講演会は令和 6 年 11 月 7 日に本校体育館で実施し、全校の幼児・児童・生徒及び保護者が参加した。

会の冒頭に夏季休暇に取り組んだレポートを元に柔道やオリンピック、永瀬選手について調べたことを発表した。発表後、各学級で考えた永瀬選手への質問タイムでは、「強くなる秘訣を知りたいです」「金メダルを取った時どんな気持ちでしたか」等という、生徒の素朴で率直な質問にも笑顔で答えてくださり、非常に和やかな雰囲気で会が始まった。

本校では中学部からタグ柔道の授業が行われていることもあり、タグ柔道の体験では高等部・中学部の生徒を中心に永瀬選手と組めることを楽しんでた。また、授業で取り組んだ経験がある中学部・高等部の生徒が幼稚園・小学部の幼児・児童にやさしく教えながら、タグ柔道を体験している様子も見られた。

後半の講演会では本校教員と対話をしながら進めるインタビューに近い形式で行われた。生徒が気になっていることを中心に、オリンピック中のパリの様子や柔道 MIND についてお話しいただいた。柔道 MIND とは「柔道を通じた人づくり」を、子どもも大人も指導者もみんなで推進する活動であり、それぞれのアルファベットに「Manners 礼節」「Independence 自立」「Nobility 高潔」「Dignity 品格」の意味を込めたものである。広報委員会でも柔道 MIND について新聞「ニュースおおつか」に書いており、そのことにも触れながら永瀬選手が大切にしている柔道 MIND である、相手への敬意と感謝などについて、幼児・児童・生徒にわかりやすいようにお話しいただいた。



3. 成果と課題

オリンピックであり金メダリストである永瀬選手との交流・講演会を中心的な行事として設定し、そこに関連づける形で各学部、様々な取り組みを行った。

永瀬選手の応援を全校に呼びかけたことで、普段は積極的に見ることのないオリンピック・パラリンピックを多くの幼児児童生徒が観戦することができた。特に知的障害を持っているということから、興味関心の幅が狭い幼児児童生徒が多くいる中で、新たな知識としてオリンピック・パラリンピックの情報を得られたことは大きな成果であったと考える。

また、関連したアダプテッドスポーツとしてタグ柔道を小学部から高等部まで経験できた。特に小学部という学齢期の早い段階からアダプテッドスポーツを経験できたことは、将来の健康的な生涯スポーツ社会への参加に向けた良いスタートを切れたのではないだろうか。

知的障害を持っている幼児児童生徒は具体的な体験を通して学習することで、その学習効果も上がり、自分ごととして捉えることができるようになる。本年度はパリオリンピックに出ており、幼児児童生徒によっては実際に一度会ったことのある永瀬選手をリアルタイムで応援する、という具体的な体験をしてから、関連する様々な授業での取り組みを行った。具体的な体験を経たことによって、知的障害がある幼児児童生徒でもこれだけ授業に積極的に取り組む様子が見られたのではないかと考える。

本年度はパリオリンピックが開催されたため、具体的な体験として応援や観戦を経験することができた。しかし来年度以降、オリンピック・パラリンピックが行われない期間に、知的障害を持っている幼児児童生徒にどのようにして具体的な体験を提供できるのか、検討していく必要があると考える。

令和6年度附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属桐が丘特別支援学校 岩井 俊夫、寒河江 核

1. アダプティッドスポーツ、パラスポーツ講習会（自己探求的活動）

本校では、学校行事見直しの一環として、これまで「運動会」として実施されてきた教育課程上の特別活動（体育的行事）について、今年度より「桐が丘スポーツ大会」と名称が変更となった。児童生徒から募った新名称のもと、行事の内容についても刷新されることとなり、新たな試みとして“全校でアダプティッドスポーツを体験する”ことが午後のプログラムとして企画された。小中高の各学部 に在籍する児童生徒を、体験希望種目のアンケートをもとに振り分け「ボッチャ」「スポーツウエルネス吹矢」「卓球パレー」「シッティングパレー」の4種目のうち2種目に参加することとした。

本取組は、自己とスポーツの関係について考究する活動を通じて、これまでのスポーツに対する見方や価値観を新たな気付きを得る機会とすることを目的としている。

そこで、専門家（元筑波大学体育系教授、松原豊氏）を招聘し、体育の授業及び大会の予行において、上記4種目を体験する時間を設定した。体育の授業では、上記4種目を実際に体験することで、大会で自分がどの種目を希望するかについて考える機会とした。また予行時には、全校児童生徒並びに教職員を対象に、松原氏による講演を開催した。講演では、インクルーシブ体育とアダプティッドスポーツの関係やアダプティッドスポーツが大事にしている「工夫を考える」ことについて学びを深める機会となった。



2. 本校運動会・桐が丘スポーツ大会に関わる競技体験（体験的活動）

桐が丘スポーツ大会の午後の部において「ボッチャ」「スポーツウエルネス吹矢」「卓球パレー」「シッティングパレー」のうち2種目に参加する形式で競技を実施した。

全校児童生徒は、午後の部の前半（40分）では「ボッチャ」か「スポーツウエルネス吹矢」のどちらかに、後半では「卓球パレー」「シッティングパレー」のどちらかに参加することとした。また、会場の体育館内に観戦エリアを設け、保護者の応援・観戦のなか競技が繰り広げられた。競技進行については、初年度でもあることから、教員を中心に行うこととした。





大会後の児童生徒のアンケート調査では「スポーツを通して他学部人達との交流が深まった」「楽しくスポーツに取り組めた」「スポーツに対しての意識が変わった」等の意見が多く寄せられ、来年度の本行事の更なるブラッシュアップが期待されることとなった。

3. 競技ボッチャの実施（体験的活動）

本校中学部・高等部の希望生徒を対象としたスポーツ部では、陸上競技やボッチャ、ハンドサッカー等の肢体不自由の障害を対象とした種目に取り組んでいる。今年度は、競技規則が簡略化されたレクリエーションボッチャから、公式競技規則に則った競技ボッチャへの大会に出場し、参加生徒が競技への理解を深めるとともに、大会参加を通じて自己のスポーツとの関わり方を認識したり、自立と社会参加に向けたきっかけとしたりすることができた。こうした活動を継続する中で、年度後半には地域で行われるボッチャ大会や交流会等に個人で参加をした生徒も居た。（写真1）



写真1 大会出場の様子

表1 今年度参加した対外的な活動

参加した対外的な活動	参加人数
東京都障害者スポーツ大会（ボッチャ競技） 個人戦	4名
第9回全国ボッチャ選抜甲子園 チーム戦	1チーム 4名
第1回ボッチャ CIAO カップ大会実施要項 チーム戦	2チーム 6名
第8回 CAC カップ学生ボッチャ交流戦大会	2チーム 10名

4. 生涯スポーツへのつながりについて（調査・探求的活動）

高等部2年生を対象とした体育の授業内で「ユニバーサルスポーツ」を考案し、校内での交流学习時の活動の一つとして取り組んだ。既存の卓球バレーを面白さ、ゲーム性、親睦の視点で意見を出し合い、「キッチン卓球バレー」を考案した。話し合いの過程では、「卓球バレー用のラケットは障害の重い人でも使うことができるが、上肢機能に障害のない人や障害が軽い人は強いボールを打ててしまう。」「上肢機能に制限がないので、強いボールを打てるが、思い切り打ってはいけない気もしてしまう。」等、障害を持つ当事者の中でも意見が異なることを捉えながら、「ラケットを選定できれば良いのではないか。」という結論に至り、ラケットを工夫することとなった。

「キッチンにあるものでやってみたら面白いかも。」「ラケットの代わりとなる物を複数用意し、選ぶ過程で自然発生的に会話が生まれ、チームで交流ができるのではないか。」といった考えがまとまり、「キッチン卓球バレー」が誕生した。その後は、考案したユニバーサルスポーツを実施し、振り返り振り返りを行いながら、生徒が協働的にルールを明確にしていった。（写真2）

考案した「キッチン卓球バレー」は校内の小学部の児童との交流の中でもみなが楽しめるスポーツであるか検証を行った。（写真3）自分たちが考案した種目を伝えるためにデモンストレーションを行ったり、小学生がわかりやすいように言葉を選んだりしながら活動する生徒の姿見られた。



写真2 考案したスポーツを試行する様子



写真3 考案したスポーツで交流をする様子

小学部におけるパラスポーツ「フライングディスク」に関する取組

附属久里浜特別支援学校 石川 千尋

1. はじめに

本校は知的障害を伴う自閉症の幼児児童が在籍している特別支援学校であり、幼稚部と小学部を設置している。小学部では、運動会やマラソン大会など、児童同士で同じ場を共有しながら、目標に向かって学習に取り組む活動が多く設定されている。児童一人一人が自ら取り組むべきことが分かり、主体的に学習に向かうことを目指し、指導内容及び方法を検討しながら授業を行っている。

2. オリンピック・パラリンピック教育の実施内容

今年度、オリンピック・パラリンピック教育において、小学部5・6年生12人を対象に、パラスポーツの一種であるフライングディスクを取り扱うこととした。

フライングディスクは、パラスポーツの中でも様々な障害種の垣根を超え、幅広い年代で楽しむことができる競技の一つである。また、ゴールに向かってディスクを投げるアキュラシーと、ディスクの飛距離を競うディスタンスの2種目があり、児童の実態に応じて多様に楽しむことができると考える。今年度のオリンピック・パラリンピック教育では、児童がパラスポーツの一種であるフライングディスクという競技を知り、経験することを通して、スポーツを楽しむことを主な目的とする。また、フライングディスクの学習を契機とし、パラスポーツの様々な競技や、ひいてはオリンピック・パラリンピックへの興味・関心が高まることが期待される。

3. 具体的な取組

(1) 体育の実践（5月～6月）

①指導の工夫

特別支援学校の体育における体づくり運動において、フライングディスクを実施した。用具を操作する運動遊びは成功体験を味わわせやすく、用具をつかむ、もつ、転がす、投げる、捕るなどの動きを、自然と繰り返し行うことができる。また、用具の素材や難易度を工夫することで、用具の操作が苦手な児童でも楽しく取り組むことができる。

小学部5・6年生の児童は、体を動かすことが好きであり、休み時間に屋外の遊具で遊んで過ごすことが多い。フライングディスクでは、児童がより意欲的に体を動かすことができるように、活動の難易度を段階的に上げたり、的当てやシュート対決などゲーム性のある内容を設定したりした。一方で、身体の動きにぎこちなさがあったり、力の調整が難しかったりする児童もいるため、より安全にフライングディスクに取り組むことができるように、ドッチビーで用いるソフトディスクを使用した。同じ動きを繰り返し練習できるように、十分な量のディスクを準備した。

②児童の様子

体育でフライングディスクを扱うに当たって、教師が映像やスライド資料を利用して、どのような種目なのか、世界中で行われている種目であることなどを説明した。児童の中には、「見たことある！」と言ってその場でディスクを投げる身振りをしたり、手渡されたディスクを自分なりに投げたりする児童もいた。授業では、まずディスクをより遠くに飛ばすことから始め、段階的に的に向って正確に飛ばすことに取り組んだ。児童が遠くに飛ばすことや的をねらうことを意識できるように、様々な自作教材を用いて授業を行った。遠くに飛ばすことができた達成感を感じたり、的に当たった喜びを感じたりしながら、意欲的に活動することができた。最初は教師の身体援助で投げる動作を体験していた児童も、繰り返すことで動きを身に付けたり、飛ばした方向に飛ばせるように手の動きや体の向きを調整したりしながら取り組む様子が見られるようになった。



フライングディスクに関する説明を見聞きする様子



教師と一緒に体の動かし方を体験する児童



ディスクを投げて飛ばしたことが実感できる工夫



的に向かって投げることで意識できる工夫



より遠くに向かってディスクを投げる児童



自分たちが投げたディスクの量が一目で分かる工夫

(2) 運動会の実践 (10月)

1学期の体育で扱ったフライングディスクを運動会の種目に設定した。フライングディスクは個人競技であるが、高学年としてより友達と協力することの大切さや競うことの面白さを感じてほしいという教師の願いから、「投げて拾って、フライングディスク合戦！」と題して赤組と白組に分かれて対決した。

児童の中には、「横から風が吹いているから、こっち向きに投げよう。」や「もっと遠くに投げると勝てるかもしれない。」などと言って、投げ方を工夫していた。自分から進んで取り組むことが難しい児童も、教師が手渡したディスクを相手の陣地

に向かって投げ、入るとハイタッチをしてうれしい気持ちを表現しながら取り組んでいた。最後は、陣地に入ったディスクの量を児童自ら数え、勝敗を決定した。勝利した赤組の児童は誇らしい表情で金メダルを受け取る様子が見られた。



体育で習得した技能を発揮し、意欲的にディスクを投げて種目に参加する児童の様子



勝敗が視覚的に理解しやすい工夫



金メダルを手にガッツポーズをする児童

(3) 学校生活全般における関連した実践

体育や運動会の実践と並行して、休み時間や生活単元学習などにおいて、世界の国名や国旗に親しむ学習を行った。地球で国の名前を調べたり、好きな国旗のイラストを切り貼りして運動会の旗作りを行ったりすることで、児童が世界の国々に興味をもつきっかけとなった。



世界の国々に興味をもち、地球儀で調べる児童

4. 成果と課題

今年度のオリンピック・パラリンピック教育では、児童がパラスポーツの一種であるフライングディスクという競技を知り、経験することを通して、スポーツをすることを楽しむことを主な目的として取り組んだ。小学部5・6年生の児童は、体育の授業でフライングディスクを行う中で、ルールや投げ方が分かっているのに向かって投げることができるようになり、教師のまねをしたり相談したりしながら投げ方を工夫する様子も見られるようになった。また、運動会でも、友達と力を合わせて競うことを楽しむ経験ができた。これらの取組から、指導内容や方法を工夫することで、教師や友達と一緒に体を動かすことの楽しさや気持ち良さを感じさせることが大切であることが分かった。

一方、学習指導要領では、体育の内容に取扱いにおいて、実際にオリンピックやパラリンピックの試合を見たり、代表選手の話に触れたりするなどして、興味をもてるようにすることが記載されている。この点については、今年度の教育活動とし

ての機会の設定が不十分であり、児童の興味・関心を高めるまでに至らなかった。本校に在籍する児童の実態に応じながら、よりオリンピックやパラリンピックなどに関連付けながら、指導を行っていきたい。次年度以降も、オリンピックやパラリンピックを始めとした様々な種目を取り上げ、運動や体を動かす遊びには多様なやり方や楽しみ方があることを、実際に体験しながら学べるように、活動を工夫したい。

○参考文献

- ・文部科学省（平成30年3月）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）



自分たちで作った運動会の旗を前に笑顔を見せる赤組の児童

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（令和6年度）

委員長	呑海 沙織	附属学校教育局教育長
副委員長	青木 隆一	附属視覚特別支援学校長
委員	雷坂 浩之	附属学校教育局次長
	梶山 正明	附属学校教育局教育長補佐
	真田 久	特命教授
	齊藤まゆみ	体育系教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	大林 太朗	体育系助教
	江上いずみ	客員教授
	山崎 和人	附属小学校教諭
	秋山 和輝	附属中学校教諭
	鮫島 康太	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校主幹教諭
	野村 拓也	附属坂戸高等学校教諭
	山本 夏幹	附属視覚特別支援学校教諭
	荒川 郁朗	附属聴覚特別支援学校教諭
	宇佐美太郎	附属大塚特別支援学校教諭
	田丸 秋穂	附属桐が丘特別支援学校副校長
	石川 千尋	附属久里浜特別支援学校教諭
オブザーバー	BENTON Caroline F.	学長特別補佐
	中塚 義実	附属高等学校教諭

オリンピック教育 vol.13 2024/04-2025/03

2025 年 7 月発行

発行者 筑波大学オリンピック研究教育センター / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所 〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学グローバルスポーツイノベーション（GSI）棟204
